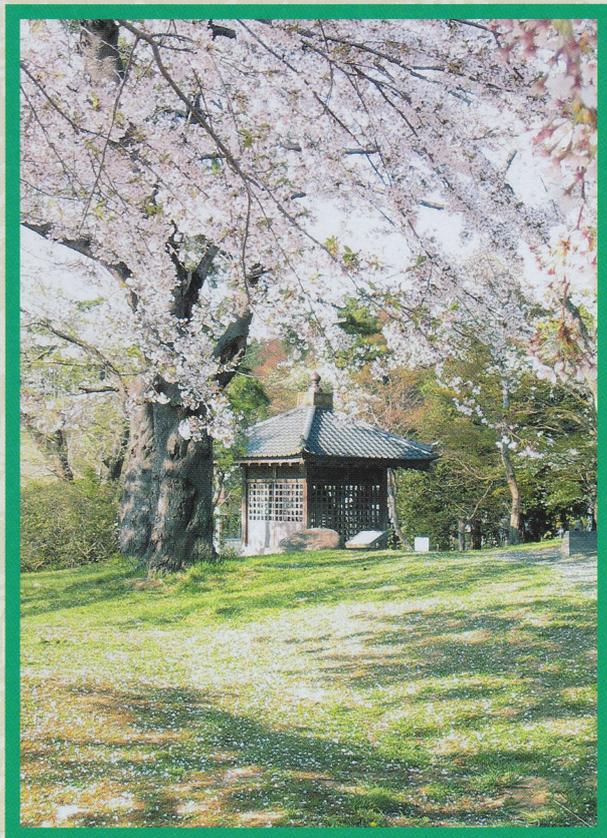


西

重要文化財

# 多賀城碑



多賀城

去京一千五百里

去蝦夷国界一百廿里

去常陸国界四百廿二里

去下野国界二二

去鞆鞆国界

軍從四位上勳四

也天平寶字六年

節度使從四位上

將軍藤原惠美朝

天平寶字六年十二月

仁部省卿兼校

造也

東人

第

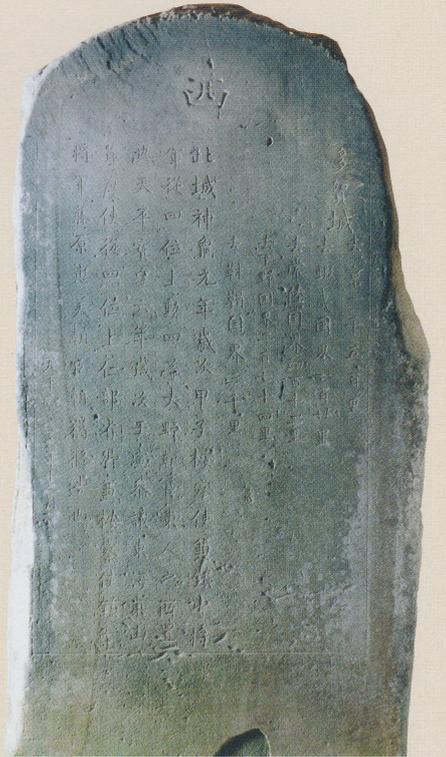
多賀城碑は、宮城県多賀城市市川字田屋場にあります。ここは奈良・平安時代、東北全域を治めるための役所である多賀城が置かれた場所で、碑は、多賀城の正門にあたる南門から城内に入ってすぐのところ立っています。

江戸時代初めに発見され、すぐに歌枕「壺 碑」の名で呼ばれました。このことが碑の存在を有名にし、松尾芭蕉、井原西鶴、新井白石、水戸光圀などが碑について書き残しています。

多賀城と古代東北の解明にとって重要な記載があり、また数少ない奈良時代の金石文として貴重であるということから、平成 10 年 6 月 30 日、国の重要文化財(古文書)に指定されました。



多賀城跡と多賀城碑



多賀城碑 (東北歴史博物館提供)

西  
 此の城は、神亀元年、歳は甲子に次る。按察使兼鎮守將軍從四位上 敷四等大野朝臣東人の置く所なり。天平宝字六年、歳は壬寅に次る。參議東海東山節度使從四位上 仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獺、修造するなり。

多賀城  
 京を去ること一千五百里  
 蝦夷国の界を去ること一百廿里  
 常陸国の界を去ること四百十二里  
 下野国の界を去ること二百七十四里  
 靺鞨国の界を去ること三千里

天平宝字六年十二月一日

## 碑の形状と碑文内容

碑は高さ 248 cm、最大幅 103 cm であり、花崗岩質砂岩という非常に硬い石材を用い、碑面のみ平らに加工されています。ほぼ真西を向き、下部を約 50 cm 埋めた状態で垂直に立っています。

首部に「西」の一字があり、その下、縦 122 cm、横 79 cm の範囲を細い線で囲んだ中に 11 行にわたって 140 の文字が彫られています。

最初の 5 行は簡条書きで、京(平城京)、蝦夷国(宮城県北以北の地域)、常陸国(茨城県)、下野国(栃木県)、靺鞨国(中国東北部)から多賀城までの距離が記されています。当時の 1 里は約 535m で、換算するとそれぞれ約 800 km、64 km、220 km、147 km となります。靺鞨国界からの距離三千里は実数ではなく、遠いということを示す数字と考えられます。

次の 5 行が本文で、前段には神亀元年(724)、大野朝臣東人が多賀城を設置したことが、後段には、天平宝字 6 年(762)藤原惠美朝臣朝獺が多賀城を修造したことが記されています。

最後の行は碑の建立年月日を示しています。

東人及び朝獺の肩書きについては、以下のとおりです。

按察使—地方行政監察のための職で、特定の国の国司が任命され、周辺数か国を管轄しました。陸奥出羽両国の按察使には陸奥守があたりました。

鎮守將軍—陸奥国に置かれた軍政機関の長官で、ほとんどが陸奥守との兼任でした。

參議—大臣及び大・中納言に次ぐもので、政府の重要事項を決定する要職。

節度使—奈良時代、軍事を司るために設置された臨時の職で、朝獺が任命されたのは、新羅との緊張関係に対応するためと考えられています。

仁部省—民政や税を取り扱う民部省のことで、卿はその長官。天平宝字 2 年(758)朝獺の父藤原仲麻呂(惠美押勝)が主な官名を中国風に改めた際に改称されました。しかしこの措置も天平宝字 8 年(764)、仲麻呂の失脚に伴い、元に戻されます。

## 碑の発見

多賀城碑は、江戸時代の初め頃に発見されたと言われています。新井白石 (1657 ~ 1725) の『同文通考』には、「万治・寛文の頃、土中からみつかったという」と記され、一方、仙台藩の儒学者佐久間洞巖 (1653 ~ 1736) の『奥羽観蹟聞老志』によれば「草莽の中にうずもれること千年」とあります。「発見」が土中から掘り出されたことを指すのか、それとも草むらの中にあつて人目につかなかつたものを確認したことを指すのか、明らかではありません。

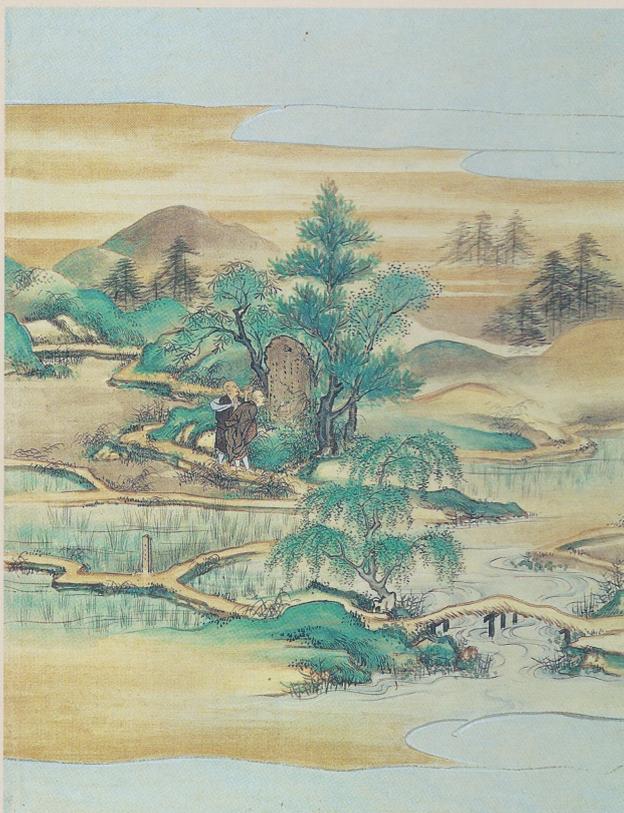


8世紀の東アジア

## 碑をめぐる人々

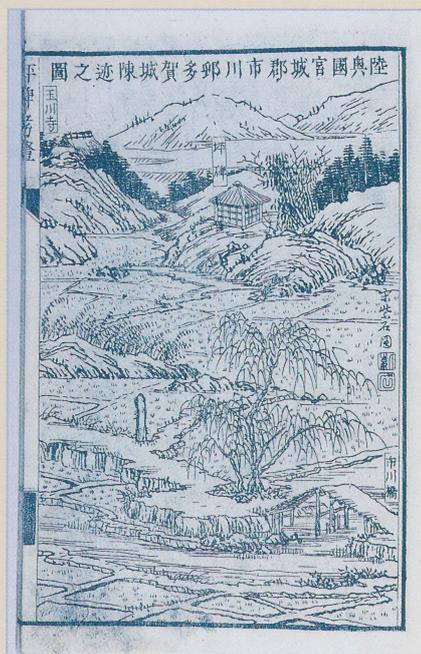
碑は発見されるとすぐ、歌枕「壺碑」の名前で呼ばれたため、井原西鶴、松尾芭蕉など多くの文人たちの関心を集めました。さらに碑についての研究も盛んで、水戸光圀は「大日本史」編纂のために家臣を多賀城に派遣し、碑の調査をさせています。

光圀はまた、この頃発見された下野国 (現在の栃木県) の那須国造碑の研究・保存につとめ、覆堂を建てて保護を行いました。多賀城に派遣した家臣の報告により、苔むした碑の様子を知った光圀は、仙台藩4代藩主伊達綱村に対し、碑を修復し覆堂を建て、後の世まで伝えるようにと、手紙を書き送っています。そして間もなく多賀城碑に覆堂が建てられました。



壺碑 (『芭蕉翁絵詞伝』 狩野正榮至信 大津市義仲寺提供)

寛政4年 (1792) 芭蕉の百回忌に義仲寺御影堂に供えられた3巻の絵巻。苔むした碑を見る芭蕉と曾良が描かれている。



坪碑史考證 藤塚知明 (宮城県図書館提供)

天明3年 (1783) 刊行。覆堂を描いたものとしては最も古い。

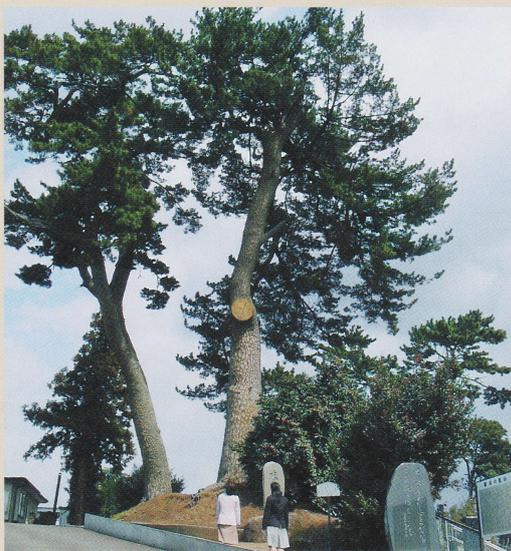


水戸光圀肖像画 (茨城県立歴史館提供)

江戸時代後期の南画家、立原杏所筆によるもの。



仙台藩の歌枕分布



末の松山

## 歌枕 — つぼのいしぶみ —

多賀城碑が発見と同時に有名になったのは、「つぼのいしぶみ」の名で呼ばれたためです。

「つぼのいしぶみ」は、平安時代の終わり頃から歌に詠み込まれた歌枕です。

「日数経て かく降りつもる 雪なれば  
つぼの碑 跡やたゆらん」  
懐円 (『歌枕名寄』)

「陸奥の おくゆかしくそ 思ほゆる  
つぼのいしぶみ そのの浜風」  
西行 (『山家集』)

「みちのくの いはで忍ぶは えぞ知らぬ  
かき尽してよ 壺のいしぶみ」  
頼朝 (『新古今和歌集』)

「つぼのいしぶみ」は、はるかなみちのくにある碑として意識されているようですが、碑の姿かたちなどが歌の主題になることはほとんどなく、歌の中では文(ふみ、または手紙・恋文)の意味で用いられるだけです。歌の内容からは碑のある場所も、さらには碑が実際にあったのか、あるいは歌の世界の中で作り上げられた幻の碑なのか、明らかではありません。

このように所在も実体も不明な「つぼのいしぶみ」と、多賀城碑との結びつきには、仙台藩が強く関わっていたようです。

江戸時代、各藩で「歌枕の整備」が行われました。これは古来の歌枕を藩内に設定しようというものです。現在多賀城市内に歌枕が集中しているのは、仙台藩による名所整備の結果であると考えられます。その方法としては、おそらく平安時代初めから有名であった「末の松山」などを核にして、その周辺に歌枕を集めていくというやり方がとられ、壺碑もこの時に設定されたのでしょうか。

南部藩でも同様のことが行われ、「末の松山」「つぼのいしぶみ」などが藩内に名所として整備されました。

## 碑の偽作説

江戸時代初め頃に発見され、壺碑の名で呼ばれた碑に対し、偽作ではないかという疑いもたれるようになってきます。

18世紀半ば、水戸藩の学者長久保赤水が「壺碑は南部藩にあり、宮城郡市川村にある碑は多賀城修造碑である」と述べたことが、碑に対する評価を大きく変えるきっかけになりました。

そして明治に入り、国学者田中義成、書家中村不折などによる、本格的な真偽論争が始まります。

碑が偽作であるとする主な根拠として①文字の彫り方 ②書風・書体 ③碑文の内容(里程・国号、官位・官職)④その他(碑の形態、関係文献批判など)が挙げられました。これに対する反論もありましたが決着がつかず、碑は偽作とされたまま、やがて碑に対する人々の関心も薄れ、碑そのものも忘れられたかのような存在となっていきます。そして資料として役立てることができないまま、多賀城跡の発掘調査が始まりました。



陸奥名所図十四景 (東北歴史博物館提供)

寛政4年(1792)刊行。南部藩の「壺村」にある「日本中央」の碑が「壺ノ石碑」として描かれている。

# 多賀城跡の発掘調査

多賀城跡の発掘調査は昭和36年、多賀城廃寺跡から始まり、38年には政庁跡の調査が行われました。

発掘調査が進むにつれて、奈良・平安時代を通じて多賀城には4時期の変遷があることがわかってきました。第Ⅰ期-多賀城創建-8世紀前半、第Ⅱ期-大々的な改修-8世紀半ばから宝亀11年(780)伊治公些麻呂の乱による火災まで、第Ⅲ期-些麻呂の乱後の復興から貞観11年(869)の大地震による崩壊まで、第Ⅳ期-地震後の復興の4期です。このうち第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ期については、調査着手以前から文献上の記載がある程度調査で裏付けられるのではないかと期待がもたれ、事実、その痕跡が確認できました。しかし第Ⅱ期、つまり8世紀半ばの大々的な改修については、全く予想外のことでした。

このことは、調査開始後もほとんど顧みられることのなかった多賀城碑が、注目されるきっかけになりました。碑には天平宝字6年(762)藤原惠美朝臣朝獯が多賀城を修造したことが記されています。つまり、発掘調査で初めて解明された第Ⅱ期の存在が、碑に刻まれていたわけです。仮に碑が偽物であれば、このような記載は不可能といわなければなりません。こうして、多賀城跡の調査成果をうけ、偽物とされてきた碑の再検討が開始されました。



多賀城政庁第Ⅱ期復元模型 (東北歴史博物館提供)

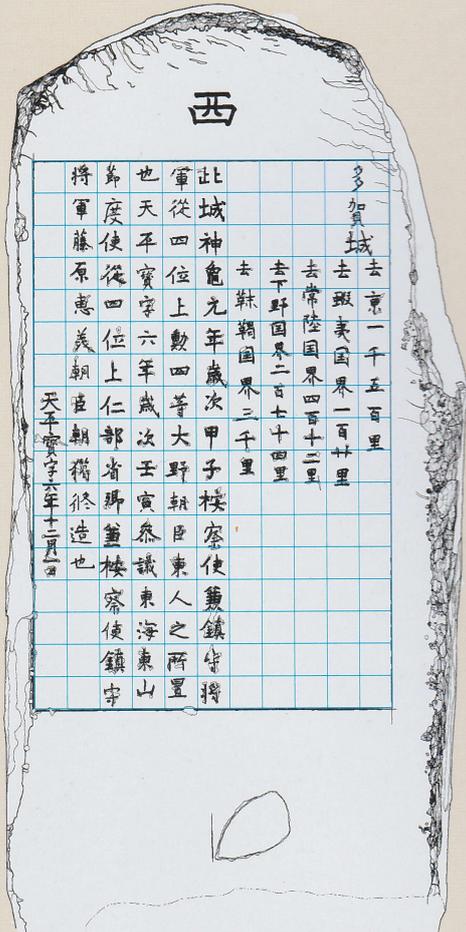
## 碑の再検討とその結果

再検討は、まず、碑を偽物としてきた根拠が確かなものであるかどうか、調査することから始まりました。その結果以下のように結論づけられました。

- ①文字の彫り方-古代の碑文の彫り方である薬研彫りであることを確認。
- ②書風・書体-中村不折が主張したような、さまざまな拓本からの文字を集めた「集字」ではなく、多くの文字をモデルとしながらも1人の人物によって書かれたものであることが判明。
- ③碑文の内容
  - a 里程-多賀城までの各国からの距離を割り出すための資料がないため、今後の課題として保留。
  - b 国号-「蝦夷国」というのは確かに存在しないが、そのように表現することで多賀城が支配する範囲を明らかにすることに意味があった。また「靺鞨国」については、「渤海国」の旧名であるとされていたが、両者が同一国の新旧の呼び名である証拠は得られなかった。
  - c 官位・官職-東人の「従四位上」については、神亀元年段階のものではなく、陸奥国在任中のものと理解すれば問題はない。朝獯は、確かに従四位上にはなっていないが、東人との均衡をとるためにあえて記したと思われる。

このように、根拠として挙げられたものは必ずしも妥当ではなく、疑わしいものは避けるという学界の風潮のなか、次第に研究の対象から遠ざけられてしまったものと思われます。さらに、安倍辰夫氏により、碑文を割り付けた際のものさしは、奈良時代に使われた天平尺である可能性が指摘されています。

多方面からの検討の結果、碑は8世紀の中央政府による東北支配の実態解明に欠くことのできない資料であることが再確認されました。



多賀城碑文割付図 (安倍辰夫氏作成)

# 日本三古碑

多賀城碑、那須国造碑、多胡碑は日本三古碑と呼ばれます。

## 那須国造碑(国宝)



那須国造碑覆堂 (栃木県立なす風土記の丘資料館提供)

永昌元年己丑年四月、飛鳥浄御原の大宮の那須国造、追大老那須直草提、評督を賜る。歳は庚子に次る年、正月二壬子の日、辰節に殄ゆ。故、意斯麻呂等、碑銘を立て偲ふと尔云う。仰ぎ惟いみるに、殯公は広氏の尊胤にして、国家の棟梁なり。一世の中に重ねて式照を被り、一命の期に連ねて再甦せらる。骨を碎き髓を挑ぐとも、豈前恩に報いむや。是を以て曾子の家に驕子有ること無く、仲尼の門に罵る者有ること無し。孝を行うの子は其の語を改めず。夏の堯の心を銘じて、神を澄まし乾を照らさむ。六月の童子は、意香しくして坤を助けむ。徒を作すこと之れ大にして、言を合わせ字に喩らかにす。故、翼無くして長く飛び、根無くして更に固からむ。(読み下し文は東野治之著『日本古代金石文の研究』を参考にした)



那須国造碑

(栃木県立なす風土記の丘資料館提供)

栃木県大田原市湯津上にあり、現在笠石神社の御神体としてまつられています。

石材は花崗閃緑岩という非常に堅い石です。高さ120cm、最大幅48.5cm。

持統天皇3年(689)4月に、評督(郡の長官)に任命された那須国造追大老那須直草提が、文武天皇4年(700)正月2日に死去したので、後継者である息子の意斯麻呂らが碑を建て、故人をしのびその業績を称え、さらに草提の地位を子が受け継いだことを述べています。

## 多胡碑(特別史跡)

弁官の符に、上野国の片岡郡・緑野郡・甘良郡并せて三郡の内、三百戸を郡と成し、羊に給いて多胡郡と成す、とあり。和銅四年三月九日甲寅の宣なり。左中弁は正五位下多治比真人。太政官は二品穂積親王。左大臣は正二位石上尊、右大臣は正二位藤原尊。

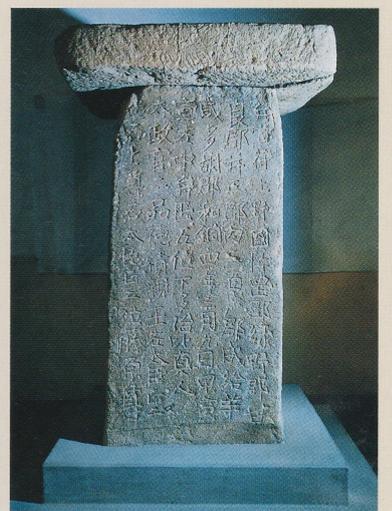
(読み下し文は群馬県立博物館『日本三古碑は語る』を参考にした)

群馬県高崎市吉井町池にあり、吉井町の南方で産出する花崗岩質砂岩を用いています。高さ127cm、幅60cm。

和銅4年(711)3月9日に、上野国片岡郡・緑野郡・甘良郡の三郡のうちの300戸で一つの郡を作り、羊という人物を長官に任命し、新しく多胡郡を置いたことが記されています。



多胡碑覆堂



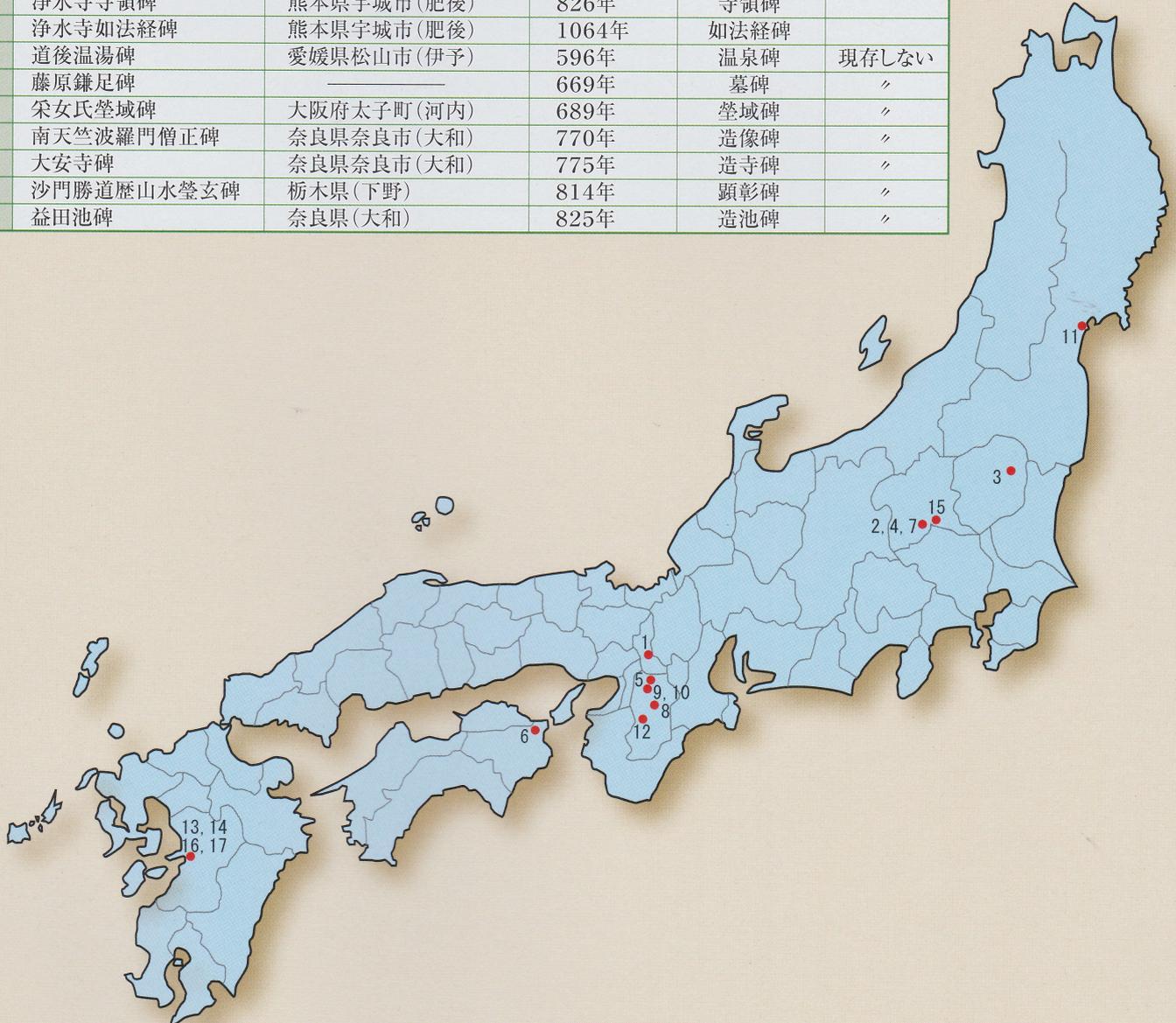
多胡碑 (多胡碑記念館提供)

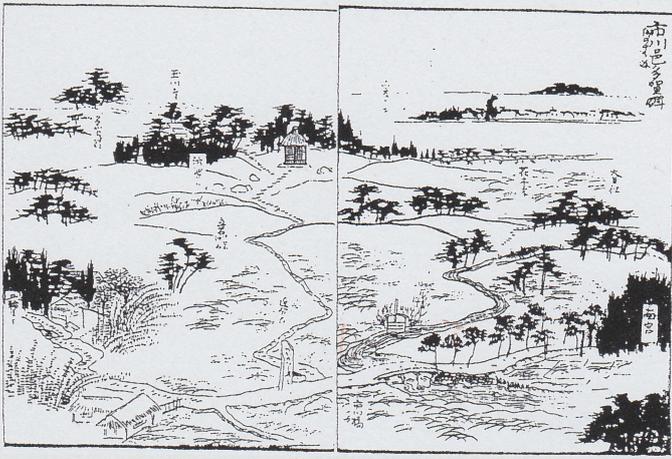
# 日本古代の碑

中国の影響により、日本列島内に碑が建てられるようになるのは、7世紀後半頃と考えられています。古代の碑で現在確認されるものは17基で、かつてあったものを含めても24基のみです。これは同時代の中国・朝鮮半島と比べると非常に少なく、さらに碑の形もほとんどが自然石を少し加工した程度のもので、石碑の文化は、古代日本においてあまり浸透しなかったようです。

## 日本の古碑一覧

番号	碑名	所在地(旧国名)	年代	性格	備考
1	宇治橋断碑	京都府宇治市(山城)	646年以降	架橋碑	
2	山ノ上碑	群馬県高崎市(上野)	681年	墓碑	
3	那須国造碑	栃木県大田原市(下野)	700年	墓碑	
4	多胡碑	群馬県高崎市(上野)	711年	建郡碑	
5	元明天皇陵碑	奈良県奈良市(大和)	721年	墓碑	
6	阿波国造碑	徳島県石井町(阿波)	723年	墓碑	
7	金井沢碑	群馬県高崎市(上野)	726年	供養碑	
8	竹野王多重塔	奈良県明日香村(大和)	751年	造塔碑	
9	仏足石	奈良県奈良市(大和)	753年	仏足石	
10	仏足石歌碑	奈良県奈良市(大和)	753年	仏足石歌碑	
11	多賀城碑	宮城県多賀城市(陸奥)	762年	修造碑	
12	宇智川磨崖碑	奈良県五條市(大和)	778年	磨崖碑	
13	浄水寺南大門碑	熊本県宇城市(肥後)	790年	造寺碑	
14	浄水寺灯籠竿石	熊本県宇城市(肥後)	801年	寄進碑	
15	山上多重塔	群馬県桐生市(上野)	801年	造塔碑	
16	浄水寺寺領碑	熊本県宇城市(肥後)	826年	寺領碑	
17	浄水寺如法経碑	熊本県宇城市(肥後)	1064年	如法経碑	
18	道後温湯碑	愛媛県松山市(伊予)	596年	温泉碑	現存しない
19	藤原鎌足碑	——	669年	墓碑	〃
20	采女氏埜域碑	大阪府太子町(河内)	689年	埜域碑	〃
21	南天竺波羅門僧正碑	奈良県奈良市(大和)	770年	造像碑	〃
22	大安寺碑	奈良県奈良市(大和)	775年	造寺碑	〃
23	沙門勝道歴山水埜玄碑	栃木県(下野)	814年	顕彰碑	〃
24	益田池碑	奈良県(大和)	825年	造池碑	〃





「市川邑多賀碑」(『奥州名所図会』大場雄渚)

19世紀初頭頃の成立。中央下に「つぼのいしぶみ」道標がみえる。



芭蕉翁礼讃碑

写真中央にあるのが礼讃碑。その右側の碑は大正4年の建立で、「御即位記念風致林」と刻まれている。

## 碑の周辺

多賀城碑の周辺は、多賀城跡の中でもひとときわ風情のある場所で、春には桜、秋には紅葉に美しく彩られます。

ここには多賀城碑にちなんでいくつかの石碑があります。

一つは「つぼのいしぶみ」と刻んだ道標です。これは奈良にある墨専門店古梅園こばいえん あるじの主、松井元泰まついもとやすが享保14年(1729)に建てたもので、この道標が立つ場所から多賀城碑までの距離が記されています。これは初め、市川橋のたもとにあったようです。

二つ目は「芭蕉翁礼讃碑ばしょうおうらいさん」です。元禄2年(1689)、おくの細道の旅に出た松尾芭蕉は、多賀城碑を訪ね、その時の感動を紀行文「おくの細道」に書き残しました。しかし、この場所を詠んだ句を残さなかったため、多賀城に来る直前、仙台市の木ノ下薬師堂で詠んだ「あやめ草足わらしに結ばん草鞋おの緒」と、「壺碑」の一節を碑に刻み、芭蕉が訪れた記念としたのでしょう。昭和2年(1927)鈴木源一郎ほか7名により建立されました。



「つぼのいしぶみ」道標

## 重要文化財 多賀城碑

■編集・発行

多賀城市教育委員会

〒985-8531 宮城県多賀城市中央二丁目 1-1

Tel 022 (368) 1141 Fax 022 (309) 2460

この印刷物は再生紙を使用しています



2013.4